

岡山方言のアスペクトに関する研究

——シトルへの一本化に伴うショールのムード化について——

岡 実 咲

1. はじめに

岡山方言で「～している」の意味に当たる言葉には、「シトル」と「ショール」の二つの形式がある。「桜が散っとる」（桜が既に散ってしまっている）と「桜が散りょーる」（桜が今まさに散っている最中である）のように「シトル」と「ショール」で意味が異なる場合もあれば、「子どもが歩いとる」と「子どもが歩きょーる」（子どもが今まさに歩いている最中である）のように「シトル」と「ショール」の意味の差がない場合もある。本研究では、この「シトル」と「ショール」に焦点をあて、その使い分けや機能差を明らかにすることを目的とする。

2. 西日本諸方言のアスペクト形式における先行研究

西日本方言で用いられるアスペクト形式（シトル形式・ショール形式）に関する研究は盛んに行われており、工藤真由美（2014）では、運動動詞を＜時間限界＞の観点から、大きく下記の三つに分類している。

表1 工藤氏による動詞分類

名称	概要	動詞の例
①主体動作 客体変化動詞	客体の変化が達成されて主体の動作が必然的に終わる＜必然的終了限界＞と主体の意志的動作が起動する＜開始限界＞のどちらも有している。	開ける、散らかす、入れる、落とす、運ぶ、建てる、売る
②主体変化動詞	主語＝主体の観点から＜変化＞だけを捉えており、変化が達成される＜必然的終了限界＞の方が焦点化される。	開く、割れる、隠れる、落ちる、集まる、建つ
③主体動作動詞	＜動作＞だけを捉えている動詞。客体や主体の変化を捉えていないがゆえに、＜必然的終了限界＞はなく、意志的動作であるがゆえに＜開始限界＞を有する。	動かす、打つ、食べる、見る、言う、歩く、踊る、休む

この動詞分類を踏まえ、工藤真由美（2014）では、シトル形式・シヨル形式の基本的なアスペクトの意味を下記のように示している。

表2 シトル形式・シヨル形式の基本的なアスペクトの意味

形式	アスペクトの意味	例
シトル形式	<p><結果> (=完成(終了)後) …変化が終わったあとに必然的に起こる変化の結果を表す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・太郎が来とる。(主体変化動詞) [今太郎がここにいる] ・生徒が窓開けとる。(主体動作客体変化動詞) [開いた窓を見て] <p>※主体動作動詞は変化を捉えていないため、シトル形式と結びついても<結果>を表すことはできない。</p>
シヨル形式	<p><進行> (=完成(終了)前) …運動の進行状態を表す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・赤ちゃんが歩きよる。(主体動作動詞) [歩いている最中なのを見て] ・お母さんが窓開けよる。(主体動作客体変化動詞) [窓を開けている最中なのを見て] ・子どもが学校から帰りよる。(主体変化動詞) [子どもが歩いているのを見て]

しかし、井上文字子（1998）、工藤真由美（1998）で指摘されているように、主体動作動詞については、ほとんどの西日本方言でシトル形式でも<進行>を表すことができる。また、主体動作客体変化動詞についても、シトル形式で<進行>を表すことができる方言がある。つまり、これら二つの動詞については、シトルへの一本化の状況が見られるということである。また、このシトルへの一本化に伴い、シヨル形式がアスペクトの意味から離れ、ムードの意味を表すようになってきている。これについて、工藤真由美（2014）では、首里・与論方言におけるシヨル形式・シオツタ形式が<目撃性>を表すこと、中井精一（2002）、西尾純二（2015）では、関西中央部方言におけるシヨル形式が<卑語>として用いられることが指摘されている。

3. シトル・シヨールの意味的な違い

2. で示したように西日本方言では、シトル形式が<結果>、シヨル形式が<進行>を表すアスペクト形式として用いられている。ただ、主体動作動詞、主体動作客体変化動詞においては、シトル形式が<進行>を表すことのできる（シトルへの一本化が見られる）地域やシトルへの一本化に伴って、

シヨル形式がアスペクトの意味から離れ、ムードの意味を表している地域がある。

岡山方言では、シトル形式「シトル」とシヨル形式「ショール」がどのように用いられているか調べるため、(1) 方言ゼミナールによる調査¹、(2) 山部氏による調査²、(3) 西尾氏による調査³の三つの先行研究を参考に追調査を行った。⁴

3.1. 先行研究と追調査との比較

(1) 方言研究ゼミナールによる調査

(1) 方言研究ゼミナールによる調査は、全国諸方言のシトル形式とシヨル形式の意味機能を調べることを目的とし、1993年～1994年に実施された調査である。追調査を行い、比較することで、シトル形式、シヨル形式のもつ意味機能の変化を見ることができると考えた。

(1) 方言研究ゼミナールによる調査(対象者:1929年生まれ)では、工藤氏による研究と同様に、シトル形式のシトルは主に<結果>(シンドッタ<やっぱり金魚は死んでいたよ>他)、シヨル形式のショールは主に<進

¹ 方言研究ゼミナール編(1994)『方言資料叢書4 方言アスペクトの研究』広島大学教育学部国語教育研究室

<調査概要>…シトル形式とシヨル形式の意味機能を調べることを目的とし、全国を対象に行われた聞き取り調査である。岡山県の調査では、新見市坂本方言が対象とされている。対象者は60代女性。調査は1993年～1994年に実施された。

² 山部順治(2004)「進行アスペクト辞の文法の話者間変異と言語・方言間変異—岡山方言の資料に基づいて—」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』第28巻 第1号pp.47-76ノートルダム清心女子大学

<調査概要>…岡山県のみを対象としたアンケート調査(各動詞の「て+おる」、「て+おる」の形を記入したあと、それを普段言うか言わないか回答する。)である。質問項目は全て<進行>を表すとしている。対象者は女子大学生。調査は2003年度に実施された。

³ 西尾純二(2015)『マイナスの待遇表現行動—対象を低く扱う表現への規制と配慮』くろしお出版

<調査概要>…関西中央部におけるシヨル形式の卑語化に関するアンケート調査(質問項目に対する回答を自由記述したあと、同じ場面でヨル形式を言うか言わないか回答する。)である。近畿地方の大学生(男女)を対象としており、2002年11月・12月、2004年10月に実施された。

⁴ 追調査に関しては、岡山県の若年層、中年層、老年層の三世代を対象に三つの先行研究と同じ調査を行った。対象者は老年層男性(筆者の祖父:1944年生まれ)老年層女性(筆者の祖母:1946年生まれ)、中年層女性(筆者の母:1971年生まれ)、若年層女性(筆者:1994年生まれ)である。老年層女性は倉敷市出身(親戚に関西出身者あり)、その他は岡山市出身である。調査は2016年9月から10月にかけて実施した。

行> (①ニヤートル②ホヨール③ナキョール<隣の犬が鳴いている>他) を表している。また、「消える」:<結果>キエトツタ<すでに消えていたよ>/<進行>①キエテイキョール②キョール<何本もの蠟燭が次々に消えていくなあ>、「建てる」:<結果>①タツテシモートル②タテトル<来年の今ごろは家をすでに建てている>/<進行>①タテョール②ローサクショールシャーチュージャ<来年の今ごろは家を建てている最中>)のように、同じ動詞でも、<結果>、<進行>の意味によってシトル、ショールの使い分けがある。このことは、シトルへの一本化はあまり進んでおらず、シトル・ショールの意味機能がはっきり分かれていることを表しているといえる。

これに対し、筆者が行った追調査では、年齢層によっては、「シモータ」「シマッタ」など別の形も見られるが、<結果> ((老年草:男) シンドツタ / (老年層:女) ①トートーシンデシモータ②トートーシンデシマッタ / (中年層) シンデシモータ / (若年層) シンドツタンヨ<やっぱり金魚は死んでいたよ>他) については主にシトルが用いられていた。しかし、<進行> ((老年層:男) ①ネートル②ネートルナー / (老年層:女) ナキョール / (中年層) ①ナイトル②ナキョールナー / (若年層) ①ナイトル②ナキョール<隣の犬が鳴いている>他) に関しては、ショールが用いられているものの、中年層や若年層ではほとんどの項目でシトルの回答も見られた。

(2) 山部氏による調査

(2) 山部氏による調査は、様々な種類の動詞を用いて<進行>のアスペクト的意味を表す例文を示し、シトルとショールの容認度の差を調べたものである。2003年度に実施された調査であり、1993年～1994年に行われた(1)方言研究ゼミナールによる調査と現在との時間軸の中間に位置づけられる。そのため、(1)方言研究ゼミナールによる調査、筆者による追調査と比較することで、岡山方言のアスペクト形式のもつ意味機能の変遷を見ることができると考えた。

(2) 山部氏による調査(対象者:1983年度・1984年度生まれ)では、主体動作動詞(しゃべる、踊る、飲む)については、シトル・ショールともに容認度が高い。この理由については、工藤真由美(1998)で指摘されているように、主体動作動詞が最もシトルへの一本化が進んでいる動詞であることが考えられる。主体変化動詞(抜ける、死ぬ、開く)については、ショールの容認度が高く、シトルの容認度は低い。これも、工藤真由美(2014)にあるように、主体変化動詞ではシトルが<進行>を表すことができず、主体変化動詞にシトルが接続すると<結果>を表すことになってしまうからであると考えられる。

これに対し、筆者が行った追調査では、主体動作動詞(しゃべる、踊る、

飲む、) について、「しゃべる」は老年層においてショールの回答しかなかったものの、その他は全年齢層でシトル・ショールともに用いられていた。主体変化動詞(抜ける、死ぬ、開く)については、全年齢層で先行研究と同じく、シトルが<進行>を表すことができず<結果>を表すことになってしまうため、ショールのみ用いられていた。

(3) 西尾氏による調査

(3) 西尾氏による調査は関西方言におけるシヨルの卑語化としての機能について調べたものである。岡山県に隣接する兵庫県の方言ではシヨルの卑語化が見られたり、岡山方言もシトルへの一本化が進んでいる地域であったりすることから、追調査を行い、岡山方言においてもシヨルの卑語化が見られるかどうか調べることで、岡山方言におけるシヨル形式のムード化について見るができると考えた。

(3) 西尾氏による調査では、関西中央部方言のシヨル形式として、関係性卑語⁵・感情性卑語⁶(好嫌・驚き)の機能が指摘されている。

これに対し、筆者が行った岡山方言を対象にした調査では、自由回答では全ての年齢層においてシヨル形式は見られなかったものの、感情性マイナスの程度がかなり大きい例において、若年層・中年層でシヨル形式を言う・言えなくないという回答が見られた。このことから、岡山方言ではシヨル形式に対して、卑語とまでは言わないものの、ふざけた言い方・悪印象を持った時の言い方という認識が見られ始めているといえる。

3.2. まとめ

(1) 方言ゼミナールによる調査、(2) 山部氏による調査と追調査の結果から、現在は本来ショールの持つ意味である<進行>を表す項目でもシトルが用いられるようになり、岡山方言ではシトルへの一本化が進んできていることが分かる。

また、(3) 西尾氏による調査と追調査の結果から、シヨルについて、関西中央部方言の卑語意識よりは弱いものであるものの、岡山県若年層・中年層ではシヨルをふざけた言い方・悪印象を持った時の言い方という認識が見られ、シヨル形式のムード化の傾向も見られ始めていることが分かる。

4. シトルへの一本化に伴うショールの意味変化

3. で述べたように、岡山方言でもシトルが本来ショールの持つアスペク

⁵ 待遇対象が話し手よりも目下であることを示す用法。

⁶ 話し手のマイナス評価を感情的に表出する用法。

卜的意味である<進行>を表すことができ、シトルへの一本化が進んでいる。先行研究では、いくつかの西日本方言において、シトルへの一本化に伴いシヨル形式がアスペクト的意味から離れ、ムード的意味を表す状況が指摘されているが、筆者が岡山方言を対象に行った方言研究ゼミナールの調査票による追調査の際、「隣の子どもが泣いている」と言う場合、「泣いとる」を用いると他人事のように聞こえ、心配したり関心を持ったりした場合には「泣きよーる」を用いるという回答が得られた。

そこで、岡山方言では、シトル・シヨールの使い分けに親しさや心配・迷惑などの関心の度合いが関係してくるのではないかという仮説の下、アンケート調査を行った。

4.1. 調査概要

岡山県の若年層、中年層、老年層に加えて、近隣県との比較を行うために、中国地方若年層、四国地方若年層、兵庫県若年層も対象に調査を行った。なお、若年層（10代～20代）、中年層（30代～60代）、老年層（70代以上）とした。対象者の詳細は以下の表に示す。

表3 ショールのムード化に関する調査対象者

岡山県			
若年層20人 (男性7、女性13)	中年層20人 (男性6、女性14)	老年層20人 (男性9、女性11)	
中国地方若年層			
広島県6人 (男性4、女性2)	鳥取県5人 (男性2、女性3)	島根県3人 (男性1、女性2)	山口県3人 (男性2、女性1)
四国地方若年層			
香川県3人 (男性1、女性2)	愛媛県3人 (男性1、女性2)	徳島県4人 (男性2、女性2)	高知県3人 (男性2、女性1)
兵庫県若年層			
兵庫県9人 (男性4、女性5)			

調査方法については、各動詞について、Ⅰ（親しさ×、心配・迷惑×）・Ⅱ（親しさ×、心配・迷惑○）・Ⅲ（親しさ○、心配・迷惑×）・Ⅳ（親しさ○、心配・迷惑○）の四つの場面を設定し、「～しとる」「～しよーる」の言い方を、普段使うかどうか、○×△（○=よく言う。×=言わない。おかしい。△=○と×の間。言ってもおかしくはない。）のいずれかで答えてもら

う形とした。また、その他の言い方をする場合「その他」の欄に記入してもらうようにした。

以下に質問項目の例を挙げる。なお、調査対象の動詞については資料に挙げたとおりである。

①「けんかする」(主体動作動詞)

- I. 小学校の近くで子ども同士がけんかをしています。どちらもあなたの知らない子どもたちです。少しもめていますがただの口げんかです。
隣を歩いている友人に「子どもがけんかしているよ。」と言うとき、「けんかしたる」と「けんかしょーる」ではどちらを言いますか。
- II. 小学校の近くで子ども同士がけんかをしています。どちらもあなたの知らない子どもたちです。かなりもめ合っていて、学校の先生を呼んだほうがよさそうです。
隣を歩いている友人に「子どもがけんかしているよ。」と言うとき、「けんかしたる」と「けんかしょーる」ではどちらを言いますか。
- III. 小学校の近くで子ども同士がけんかをしています。見るとどちらも近所の顔見知りの子どもです。少しもめていますがただの口げんかです。
隣を歩いている友人に「子どもがけんかしているよ。」と言うとき、「けんかしたる」と「けんかしょーる」ではどちらを言いますか。
- IV. 小学校の近くで子ども同士がけんかをしています。見るとどちらも近所の顔見知りの子どもです。かなりもめ合っていて、学校の先生を呼んだほうがよさそうです。
隣を歩いている友人に「子どもがけんかしているよ。」と言うとき、「けんかしたる」と「けんかしょーる」ではどちらを言いますか。

回答については、○を2点、△を1点、×を0点とし、それぞれの質問文について総計点を出した。そして、この総計点を可能な最高点(回答者数×2)で割ることによって、満点が100になるように換算した結果の数字を、シトル・ショールの容認度として示した。なお、この容認度の算出方法は、山部(2004)を参考にした。各県の状況を示した表では、各質問項目のシトル・ショールのうち、容認度の高いほうに色を付けて示した。

調査票の質問文にある「シトル」と「ショール」は岡山県で用いられるアスペクト形式であるため、「その他」に記入された他県のアスペクト形式の扱いは次のようにした。

- 山口県：シチオル、高知県：シチュー、徳島県・兵庫県：シトー
→シトルとして分類
- 広島県・山口県・香川県・愛媛県・徳島県・兵庫県：シヨル、徳島県：
シヨル、高知県：シユー

→ショールとして分類

4.2. 仮説

調査を行う前に先行研究や追調査をもとに以下の仮説を立てた。

- (1) 主体動作動詞 (①②)、現象 (動き) 動詞 (③④)⁷、主体動作客体変化動詞 (⑦) については、シトルがショールの意味機能である<進行>を表すことができる。そのため、ショールが<進行>の意味を離れ、親しさや心配・迷惑など心の動きを表すために用いられることが考えられる。したがって、親しさ○、心配・迷惑○においてはシトルよりもショールが用いられる。
- (2) ⑤困るは、筆者が行った追調査において、中年層・老年層ではシトルの回答しか見られなかった。したがって、年齢層によって回答に差が出る。
- (3) ⑧⑨の質問文のアスペクト的意味は<結果>を設定している。ショールは<結果>を表すことができないため、これらの質問項目では回答としてシトルのみが見られる。
- (4) ⑩⑪は同じ動詞で<進行>と<結果>のアスペクト的意味を設定している。場面を表し分けるために、⑩ではショール、⑪ではシトルが用いられる。

4.3. 調査結果と考察

4.3.1. 各方言の調査結果

調査の結果、岡山県若年層を中心に、岡山県中年層、広島県若年層、鳥取県若年層で①② (主体動作動詞) ③ (現象 (動き) 動詞) ⑦ (主体動作客体変化動詞) といったシトルへの一本化が進んでいる運動動詞において、他人事だとシトル、親しさや心配等の関心の度合いが高まるとショールが選択される傾向が見られた。このことについて、③泣くを例に挙げ、詳しく述べていく。

⁷ 現象 (動き) 動詞…工藤真由美 (2014) において、動作動詞と状態動詞の中間に位置づくとして、現象や無意志の動きを表す動詞。工藤氏は、「泣く、鳴く」のようなものは主体動作動詞のなかに、「照る、光る」のようなものは状態動詞のなかに含めてもよいかもしれないとしている。

(動詞の例) 泣く、動く、笑う、照る、光る、輝く、ざわめく、流れる

表4 岡山県調査結果 (③泣く)

	I		II		III		IV	
	シトル	ショール	シトル	ショール	シトル	ショール	シトル	ショール
③泣く [若]	75	73	63	83	65	85	70	78
[中]	78	58	65	75	63	73	65	83
[老]	55	83	60	85	70	75	60	83

岡山県若年層・岡山県中年層では、I（親しさ×、心配・迷惑×）といった他人事の場合にはシトルが用いられ、II（親しさ×、心配・迷惑○）・III（親しさ○、心配・迷惑×）・IV（親しさ○、心配・迷惑○）といった＜親しさ＞や＜心配・迷惑＞を表す場合にはショールが用いられる傾向が見られる。岡山県老年層では、全ての場面でショールの容認度のほうが高くなっている。③の他にも、岡山県若年層では、①②⑦において、岡山県中年層では、⑦において、親しさや心配・迷惑の度合いによるシトル・ショールの使い分けが見られた。岡山県老年層については、全ての質問項目において、そのような使い分けは見られなかった。

表5 広島県・鳥取県調査結果 (③泣く)

	I		II		III		IV	
	シトル	ショール	シトル	ショール	シトル	ショール	シトル	ショール
③泣く	82	50	64	77	68	73	55	91

岡山県を除いた中国地方の状況については、鳥根県と山口県の対象者がほぼ全ての項目でシトル形式を選択していたため、＜進行＞の aspek 的意味を表す場合にシトルとショールの両者が用いられる広島県と鳥取県に絞って分析を行った。

岡山県の状況よりわずかな差であるものの、Iの場面のような他人事だとシトル、II、III、IVのように親しさや心配・迷惑の度合いが上がるとショールが使われる傾向が見られる。広島県若年層・鳥取県若年層の調査結果では、③の他に①②においても同様の傾向が見られた。

表6 香川県・愛媛県・徳島県調査結果 (③泣く、⑦運ぶ)

	I		II		III		IV	
	シトル	ショール	シトル	ショール	シトル	ショール	シトル	ショール
③泣く	70	90	60	90	70	85	75	85
⑦運ぶ	85	65	85	70	65	90	70	90

四国地方の状況については、高知県の対象者がほぼ全ての項目でシトル形式を選択していたため、シトルとショールの両者が＜進行＞の意味で用いる

ことのできる香川県、愛媛県、徳島県に絞って分析を行った。

③では、全ての場面でシトル形式の容認度が高く、親しさや心配・迷惑の度合いによるシトル、ショール（シヨル形式）の使い分けは見られなかった。ただ、⑦については、親しさ×だとシトル形式、親しさ○だとシヨル形式が選択される傾向が見られた。しかし、全体的にショールの容認度のほうが高いのは変わらず、四国地方では、親しさや心配・迷惑の度合いによるシトル・ショールの使い分けは進んでいないと考えられる。

表7 兵庫県調査結果（③泣く）

	I		II		III		IV	
	シトル	ショール	シトル	ショール	シトル	ショール	シトル	ショール
③泣く	100	17	89	44	94	22	89	39

兵庫県では、全ての場面でシトルの容認度のほうが高いという結果が得られた。兵庫県では、アスペクト的意味を表すときには主にシトルが用いられているため、全体的に見てもほとんどの項目でシトルの容認度のほうが高く、親しさや心配の度合いによる使い分けは見られなかった。

4.3.2.岡山方言の調査結果

4.3.1.で取り上げた「泣く」以外の動詞について、岡山県の結果を中心に以下にまとめる。⁸

一点目は、状態動詞についてである。⑤困る、⑥いらいらするといった状態動詞は、全体的にシトルが主に用いられ、親しさや心配・迷惑による使い分けは見られなかった。

二点目は、＜結果＞のアスペクト的意味を表す例についてである。⑧散らかす、⑨割れる、⑩集まる＜結果＞は、ショールが＜結果＞のアスペクト的意味を表すことができないため、仮説通り全てシトルの容認度のほうが高かった。

三点目は、調査票の場面設定における問題点についてである。④燃えるはI・Ⅲでシトル、II・Ⅳでショールの容認度が高くなっている。これについては、場面設定の「火はほとんど消えている」（I・Ⅲ）が＜結果＞、「勢いよく燃えている」（II・Ⅳ）が＜進行＞と捉えられてしまった可能性が考えられる。また、⑩集まる＜進行＞はI・Ⅲでショール、II・Ⅳでシトルの容認度が高くなっている。これについても、場面設定の「人混みは歩くのに支障はない程度」（I、Ⅲ）が＜進行＞、「人混みのせいで前に進めないほど」（II、Ⅳ）が＜結果＞と捉えられてしまった可能性が考えられる。

8 岡山県の調査結果（全体）は資料（pp.12-13）を参照。

5. 結論と課題

4. シトルへの一本化に伴うショールの意味変化で取り上げた調査の結果から、岡山県の若年層を中心に岡山県中年層、広島県若年層、鳥取県若年層でシトルへの一本化が進んでいる運動動詞において、親しさや心配の度合いによるシトル・ショールの使い分けの傾向があるといえる。ショールが<親しさ><心配>を表すようになった理由を以下のように考えた。

岡山方言を含め、西日本方言で用いられるアスペクト形式は基本的にシトル形式が<結果>、シヨル形式が<進行>を表している。しかし、現在、西日本方言全体で見られるように、岡山方言でも、シトルが<結果>、ショールが<進行>を表すという状況から、ショールが意味機能を縮小し、シトルが<進行>を表すことができるなど、シトルへの一本化が進んでいる。そして、それに伴い、ショールは<親しさ>や<心配・迷惑>といった心の動きを表す形式として新たな意味機能を持ち始めていると考えることができる。

ただ、動詞や年齢層によってはシトルとショールの容認度の差が小さいものもあり、現在、ショールが<親しさ>、<心配・迷惑>のムード的意味を獲得する途中の段階にあると考えられる。

参考文献

- ・井上文子（1998）『日本語方言アスペクトの動態—存在型表現形式に焦点をあてて』秋山書店
- ・工藤真由美（1998）「西日本諸方言のアスペクト体系の記述をめぐって—中間報告と今後の課題—」『日本語研究』第18号pp.1-pp.11 東京都立大学
- ・工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
- ・中井精一（2002）「西日本言語域における畿内型待遇表現の特質」『社会言語科学』第5巻第1号pp.42-55 社会言語科学会
- ・西尾純二（2015）『マイナスの待遇表現行動—対象を低く扱う表現への規制と配慮』くろしお出版
- ・方言研究ゼミナール編（1994）『方言資料叢書4 方言アスペクトの研究』広島大学教育学部国語教育研究室
- ・山部順治（2004）「進行アスペクト辞の文法の話者間変異と言語・方言間変異—岡山方言の資料に基づいて—」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』第28巻第1号pp.47-76 ノートルダム清心女子大学
(本学 卒業生)

資料 岡山県調査結果（全体）

	I		II		III		IV	
	シトル	シヨール	シトル	シヨール	シトル	シヨール	シトル	シヨール
①けんかする （主体動作動詞） [若]	85	75	73	78	78（差なし）		68	80
[中]	58	90	58	90	58	85	55	83
[老]	65	78	53	85	63	78	60	75
②食べる （主体動作動詞） [若]	75	53	68	58	60	75	55	75
[中]	58	65	55	60	53	70	58	60
[老]	60	70	63	60	53	78	58	68
③泣く （現象（動き）動詞） [若]	75	73	63	83	65	85	70	78
[中]	78	58	65	75	63	73	65	83
[老]	55	83	60	85	70	75	60	83
④燃える （現象（動き）動詞） [若]	75	45	70	80	90	50	70	78
[中]	80	45	58	80	83	43	65	78
[老]	78	50	60	73	85	40	65	70
⑤困る （状態動詞） [若]	95	20	88	43	95	25	85	50
[中]	83	35	78	48	75	50	70	65
[老]	78	48	73	63	80	48	75	58
⑥いらいらする （状態動詞） [若]	70	63	73	75	80	58	78	75
[中]	83	65	78（差なし）		73（差なし）		73	83
[老]	78	60	80	55	65	78	73	70
⑦運ぶ （主体動作 客体変化動詞） [若]	73	68	83	65	78	68	73	78

[中]	73	68	75	70	70	75	73	78
[老]	80	55	78	55	65	68	70	65
⑧散らかす (主体動作 客体変化 動詞) [若]	95	18	98	18	95	23	98	20
[中]	93	18	85	35	90	30	80	43
[老]	95	28	88	38	85	38	78	45
⑨割れる (主体変化 動詞) [若]	95	10	100	8	95	15	100	5
[中]	73	45	98	8	75	40	95	10
[老]	70	48	93	23	68	53	85	30
⑩集まる (主体変化 動詞) <進行> [若]	38	90	85	43	68	83	90	50
[中]	48	80	85	43	55	80	88	38
[老]	38	93	78	58	50	83	85	48
⑪集まる (主体変化 動詞) <結果> [若]	98	13	100	8	100	15	98	18
[中]	95	25	93	23	90	33	93	28
[老]	78	43	90	30	70	48	85	33